

言葉の弄び：言語文化の一考察

多久和，新爾
九州大学教養部：教授

<https://doi.org/10.15017/6795099>

出版情報：言語科学. 8, pp. 67-70, 1972-03-29. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：



言葉の遊び

——言語文化※の一考察——

多 久 和 新 爾

言語と文化の関係は、一般に世間で考えられている以上に密接である。言語の役割は文化への手引きを演ずるのみならず、急速に変化する技術社会のなかで「人間みな兄弟」という社会連帯感を養成する主役をはたすものである。言語の二大機能は、伝達と思考にある。この機能が混乱する時は、文化も混乱する時である。孔子が、乱世を救うためには、「それ名を正さんか」と答えたと伝えられている。かつての日本陸軍が初年兵教育に採用した「軍隊用語」の徹底的使用の目的は、「地方」（民間）から入隊してきた若者に特殊な、軍隊でしか通用しない言葉を叩きこんで、一日も早く忠誠な軍人に仕立てることにあった。一部の仲間には解らない特別な言葉の相互使用によって、その集団の団結力を高める風習は、戦後の日本の社会に伝承されている。旧陸軍では、洗面器のことを面洗器とよび、鉄砲は小銃と称するように初年兵は教育されていた。これなどは、地方人でもわかる言葉である。アメリカの占領軍のことを、日本人が進駐軍と戦後よびならわしていた理由もわからぬではない。そしてこれは現実との妥協精神に富む日本人特有の国民性のせいだと理解することもできよう。ところが卑小な自己の感覚にもとづく「言葉の遊び」が1971年から1972年にかけて、日本で流行しはじめている。遊びの度が過ぎると、社会生活にいろいろな歪みを生じさせる。これは逆に、文化に混乱があるので、「言葉の遊び」という現象を引き起している、とも言える。その最も良い、というよりは恐ろしい例が最近流行語になりつつある「総括」である。総括 (summary; generalization) とは、『広辞苑』によると、① 別々のものをまとめあわせること。一まとめにすること。すべくくすること。② 〔論〕多くの異なる概念を抽象または連合して、統一的全体の中に結合すること、を意味する。ところが、連合赤軍はリンチを「総括」と呼んだ。「自供によれば、それはブルジョア社会の残存物を排泄して革命の戦士になることだ。討論の過程で総括し尽せないときは、暴力で援助し、それが死に至ったときは彼の敗北となる、という。だが結果的に「総括」は死であった。」⁽¹⁾

1971年は、日本が国際的に孤立していることを認めさせられた年であった。日米繊維交渉、「ニクソン訪中」によるアメリカからの孤立、通貨調整によるヨーロッパからの孤立、中国の国連復帰による中国からの孤立がその重要なものであった。こうした日本の孤立は、日本の対外政策や外交官の性格から主として生じた、と簡単に言いきれない問題を含んでいる。それは国際性に乏しい日本語のみに頼ろうとする、われわれ日本人の体質にも関係がある。しかしもっと困った問題は、東南アジアの諸国民から日本人だけが「イエロウ・ヤンキー」と呼ばれ、

※ 言語文化という言葉は文化即言語、言語即文化という言葉と文化の相即関係をあらわす、筆者たちの新造語である。くわしくは筆者の小論、「言語文化という造語は成立するか」（『言語科学』第7号、45～47頁）を参照されたい。

(1)『週刊朝日』1972、3-24、20頁

「エコノミック・アニマル」と見られる、事実である。アジアからも孤立すれば、全く世界の孤児にならざるを得ない。天然資源に乏しい日本は一種の世界的経済によって「工業大国」の地位を保持している。従って日本は世界各国と平和共存して始めて生活できる。こうした世界的な状態の維持こそ、日本の進むべき方向である。それにもかかわらず、明治維新以降の日本人は先進国の欧米諸国に追いつくために「脱アジア」に一所懸命になってきた。その結果、顔はアジア人であっても、物の見方、考え方がいつしか西欧人のそれに成っている。そして戦後の今日、GNPで西欧の水準に到達した。「アジア人の心」を失った日本の国際的孤立を代償にして得たものが、経済大国であったとすれば、正にこれは日本文化の危機である。日本人論が再び盛んになってきた。が今回の日本人論は明治百年祭に際して論壇を賑わした「日本近代化」(Modernization of Japan)でなくて、国際的孤立という危機感を背景にした「日本人とは何か」という反省論が主流を占めている。日本人も戦後の12才説から、ようやく成人期に到達したのであろうか。

このような背景のもとで、1971年の4月から1972年の3月にかけて日本で流行した新語のいくつかを採りあげてみたい。こうした新語の中には、日本文化を成立させた日本人とは一体何かという質問に答えると同時に、世界的であるべき日本の現代文化のあり方に一種の警告と希望を与えているものがある。

「総括」という特異用語の前からあって、今なお流行っている新造語に「ニクソン・ショック」がある。1971年7月15日の「ニクソン訪中」声明によって、まずショックの第1波が日本国民わけでも向米一辺倒の佐藤政権を襲った。これより先、名古屋訪問中であつた中国卓球チームが米中接触のきっかけを作った事実を新聞は「頭越し米中ピンポン外交」とよんであわてふためいた。ついで8月15日の「ニクソン・新経済政策」発表は、ショックの第2波というよりも、戦後世界における画期的なアメリカの現実政策(Realpolitik)であつた。それは「ドル体制の終焉」を意味すると同時にアメリカの東南アジア政策が根本的に修正をせまられたことを示すものであつた。筆者は、これら二つの事件から受けた日本国民の衝撃を象徴する「ニクソン・ショック」という言葉自体が、外国からの圧力にきわめて鋭敏な日本文化のパターンを証明している、と思う者である。ニクソンの「訪中声明」は3分前に、「ドル防衛策」は発表の10分前に知らされたという同盟国日本は、日米関係に危機感を抱きはじめていた。50年前の日英同盟破棄に似てきた日米関係を憂うあまり、元駐英大使松本俊一氏は、「天下に恥をさらす日本外交」という文章⁽²⁾の中で、今後の日米間の問題は日中問題にくらべるとさらに複雑困難であつて、尋常一様の外交手段で解決できる見とおしのたたないものも含まれている、と警告を発している。歴史こそ外交の指南車である。

「長い間、日英同盟を外交の指針として、イギリスのいいなりになりながら、第1次大戦中に国力を温存して世界の政治・経済で一躍花形のような地位を与えられた日本が、結局は英米ににらまれて、ワシントン会議という舞台上で急に軍事上、外交上の足かせ手かせをはめられてしまったことは、外交史上あまり例のないことであつた。……もし日英同盟廃棄で孤立した日本が軍国主義の道をたどった歴史を繰り返すようなことがあつては、せっかくの日本の繁栄は

(2)『文芸春秋』昭和46年12月号、132頁

きんか
槿花一朝の夢と化するであろう。」⁽³⁾

1971年の暮になると、元陸軍伍長横井庄一さんがグアム島で発見された。日本人はよく粘りが無いといわれるが、仕立屋の横井さんは戦後の28年間を洞穴の中で粘ったのである。粘った原因は、横井伍長は談話の中で、出ていきたいとは何度か思ったが、島民やアメリカ兵がこわかった、だが日本は十年ごととに大きな戦争を起しているからこのまま頑張っておれば日本軍が迎えに来てくれるであろう、と言っている。筆者も敗戦後、山西省の太行山脈を横断する北同蒲線の一駅舎で最初の越冬をしたが、夜毎の語りあいのなかに、ここにこうしておれば再起した日本軍が大陸に進攻して、残留しているわれわれを救ってくれると真顔で信じていた部下の顔を思い出す。それよりも、筆者は山西省がやがてアメリカとソ連との軍隊が中国で衝突する最大の激戦場になるであろう、とひそかに信じていた。とにかく、横井伍長を28年間、熱帯のジャングルの生活に耐えさせた精神的支柱は、「天皇陛下のために」という信念であった。「生きて虜囚の辱しめを受けず」という戦陣訓が、彼の逃亡生活を続行させていたことも否定できない。日本に帰ったら、天皇陛下にお逢いして、無念の死をジャングルでとげた戦友のことをお伝えしたく存じております、と軍隊口調でテレビの報道員に語っていた横井さん。もし横井伍長が今から20年前に発見されていたら、このようにマスコミによってセンセーショナルな「生きていた英霊」の称号も贈られず、逆に敵前逃亡の汚名を着せられていたであろう。ところが、横井さんの英雄扱いは戦後30年足らずのうちに日本人の生死に対する価値観に180度の転換があったことを物語る。西郷隆盛が「丈夫玉砕^{せん}全を恥ず」という漢詩をよんで、男子は死ぬべき時には、いさぎよく玉と砕けるのが真の男子である、瓦になってでも生きつづけるのは恥ずべきことである、という所信を述べたことは、よく知られている。このような死生観が全く通用しないのが、戦後の日本人、とくに戦後生まれの20才台の若者である。1972年の2月になると、連合赤軍の5名が牟田泰子さんを人質にとって「浅間山荘」に立てこもり、2名の機動隊員と1名の民間人を銃やピストルで射殺する現場を、連続10時間におよんだテレビ放送で全国民が目撃した。彼等5名はだれひとりとして射殺もされず、貫通銃創も負わず、機動隊によって逮捕された。これは、戦後の日本人は捕虜になることを恥と思わなくなったし、生きのこるためにはどんな手段をとってもよい、と考えるようになった実例である。

1969年3月4日、九州大学入学試験の最中に過激派学生一派が試験場にあてられた教養部本館を突然封鎖し、その封鎖は同月21日まで続いた。その時、本館内に入りこんでいた過激派学生と教官の論争があった。「われわれに敵対する者は殺してもかまわない。敵は殺さねばならぬ」と真顔で答えていた、まだ少年らしきの残っている某君の言葉を筆者は今あらためて思い起す。こうした恐るべき「言葉」は、「浅間山荘事件」後、事実となっていたことが判明してきた。ほとんどの国民が、連合赤軍最高幹部森恒夫、永田洋子らによる「リンチ大量殺人」に大きな衝撃を受けた。彼らはリンチを「総括」とよんでいたのである。

「天皇の仕立屋」横井さんも、「総括」によって12名の同志を蛇のなぶり殺し式にリンチ大量殺人をはたした森、永田らも日本人である。彼らは私たちと無縁のものとは考えられない。この際、彼らの行動を解く鍵として『菊と刀』という相矛盾した日本文化のパターンを援用して

(3)『文芸春秋』昭和46年12月号、132頁

みるのもよい。しかし最も肝心なことは、こうした事件がどうして起きたかという原因の探求にある。

「ニクソン・ショック」や「頭越し米中ピンポン外交」という言葉自体が、日本文化が外国の圧力に対して極めて敏感であるという事実、そして逆にアメリカが自国内の圧力に動かされ易い、という日本人の対アメリカのイメージを示している。「天皇陛下のために」とは、文字通り日本人の忠誠心と、生活様式への順応性を示す内容を持っている。これに反し、「総括」は、たとえ連合赤軍の定義がどうであろうとも、結果は人間を人間の手で死に到らしめる内容を持つ。ここに連合赤軍が陥った、そして私たち知識人も無意識のうちにおかしがちな「言葉の弄び」がある。自分の言葉に酔って、自分を神々のひとりと慢心する。ここにピークオッド号の船長エイハブが陥った知的高慢がある。ここにヒットラーのユダヤ人虐殺の因子がある。

人間はシムボル、とくに発声言語の使用によって社会の成員の間の協力関係に、数多くの可能な道を開いてきた歴史的過程を持つ。われわれはより謙虚な態度でこの事実を学び取らねばならぬ。一部の集団の内部でのみ通用する言葉で文化革命を成就しようとしても、それは集団の崩壊を促進するにとどまる。永遠の生命を宿す言葉を今ほど切実に必要とする時機はないであろう。危機に臨んで人間の真価が発揮される。諺に「禍を転じて福となす」というではないか。急速な変化で進む技術文明、環境破壊にもとづく公害、都市化、人口の増加、いずれも人類が直面している危機である。あえて日本に限らぬ、こうした全世界的危機を乗り越えるために言葉による人間相互の信頼が要求されている。

1972. 3. 25.

Playing with Words An Approach to "Language-Culture"

Shinji Takuwa

Language is not only a guide to social reality, but also a symbol of the culture of a nation. It is natural that we would not think much of an expert on American culture who controlled no English. In this sense, the matter of cultural interpretation through language, that is, "language-culture" will be all the more important.

Generally speaking, in a country where its culture is disrupted with the lack of confidence between young and old, the use of its language is inevitably confused. More than that, the result of the confused and divided culture will be one of the causes of unsettled problems; for example, the alienation of the young, the danger of repression or a police state. A cruel and unnecessary war also will pour violence into a society. This is unfortunately true with the past Japan as well as the present United States. It is clear, however, that America is experiencing a crisis of the spirit. Americans have become more painfully conscious of what pulls them apart than what holds them together. On the contrary, the Japanese people, especially some of the college young, are playing with words while they are unconscious of what self-centered words-communication brings. As a result, these kids are already degenerating into bloody lawlessness.

Last summer, 1971, we had a notorious word, the Nixon-shock. This kind of newly-coined word might be said to be a symbol of the economic and spiritual surprise and confusion on the part of the Japanese. They seem to be more sensitive towards the foreign pressure than the American people. Needless to say, President Nixon and his agents were forced to take a drastic defensiveness in an effort to protect American dollar. Nevertheless, most Japanese were shocked.

In February, 1972, the "United Red Army," one of the most militant radical student sects in Japan, killed their some twenty comrades mainly because of their followers' trifle behavior and the so-called anti-revolution words, it is said. The killing officers tried to cover their murder by calling 'Summing Up' (Sōkatsu in Japanese), but in vain. Language itself will not be the main cause of murder-lynch, but their 'Sōkatsu' became its cause. It was in playing with words that these kids degenerated into massacre.